

「日本人」について考えてみた

奥村 太



唐突ですが、日々の生活の中で自分が「日本人である。」ということを意識することはありますか？よく、サッカー等の国際大会の時に日本人選手や日本人サポーターの立ち居振る舞いについて報道されることはありますが、あのような報道を見聞きして自分も「日本人」であることを意識することはありますか？また、仮に外国人の人達から「日本人の特徴は何ですか？」と問われたら、何と答えましか？意外とこれらの質問に答えるのは難しいのではないのでしょうか？本稿では、これらの疑問に対する私なりの答えについて、私の思

い出話も交えながら考えてみたいと思います。

本題に入る前に、簡単ではありますが「日本」という国の特徴を考えてみたいと思います。日本は四方を海に囲まれた島国であり、歴史的に様々な国の影響は受けつつも、各時代においてそれらを時には取捨選択し、また時には自分たちなりにアレンジして独自の文化や習慣を形成してきました。これが陸続きの国であつたならば、もっと「独自」色は薄れ、隣国との違いが少なくなっていたかもしれません。このことは、その国に住む人を見ることがでもよく分かるのではないのでしょうか？最近では日本でも普段の生活をしている中で外国人（旅行者の方も含めて）の方を目にすることは多くなってきましたが、それでも日本では「日本人」が圧倒的多数をしめています。所謂、「単一民族国家」というやつで

す。このような環境に生まれ育った私達からすると、あまりにも普通すぎて何の違和感も感じない人が殆どだと思いますが、他の国に目を向けるとそれが普通ではないということが分かります。例えばお隣の中国は「56」の民族で構成されているとのことですし、アメリカやその他ヨーロッパの国々も様々な民族や人種が混在している状態が普通となっており、所謂「多民族国家」になっているわけです。このような国の性質の違いがよく分かるのが、それぞれの国の政治的な代表者である政治家の顔ぶれを見るとよく分かんと思えます。もし興味があれば、一度、色々な国の「議会」の風景を見てみて下さい。それぞれがどのような人達で構成されているのかがよく分かります。

では、日本のような「単一民族国家」とアメリカや中国のような「多民族国家」では「国

をまとめる上での苦労は同じものなのでしょうか？それとも違うのでしょうか？もちろん同じような苦労もあるうかと思いますが、最も大きな違いは、「多民族国家」では自国民に「○○人である。」という認識を持たせるために多大な努力が必要となってしまうということです。自国民が様々な民族や人種で構成されている場合、当然それぞれのバックグラウンドが違うわけですから、「共通項を見出し、それを浸透させる」という努力や工夫を続けなければならないというまで経つてもまとまることができないわけです。逆にいうと、そのような国ではそういった努力や工夫が行われているため、「○○人としての意識やその特徴」といったものを認識している人が多いように感じられます。一方で、日本のような「単一民族国家」では、特段の努力や工夫をしなくても何となく「日本人」という概念や共通認識を持

つことができちゃうので、普通に日本で生活しているとかななか「日本人である」ということを意識したり、「日本人の特徴」について考えたりすることはありません。

かくいう私も当然のことながら、高校を卒業するまでは自分が「日本人」であることを深く考えるわけでもなく、身の回りの環境が「普通」であると感じながら生活していました。ところが、大学への進学を機に自分を取り巻く環境が大きく変化し、それにより自分が「日本人であること」や「日本人としてどうあるべきなのか」について考えさせられることになりました。

私は幸運にも両親の理解と支援を頂き、高校卒業後にオーストラリアの大学に留学することとなりました。それまで海外に行ったことはなく初めての海外が留学のタイミングと

いうことになりました。今まで日本でしか生活していなかった私は「外国人」という立場になったことはありませんでしたので、この時が私の人生初めての「外国人」という立場での生活となったわけです。オーストラリアでの学生生活は楽しいことも大変なことも色々とありましたが、学業でも日常生活でも、自分がこの場所では「外国人（日本人）」であるということを意識しない時はありませんでした。その中でも、学業の傍らで所属していた大学の剣道部での思い出は、日本人である自分を見つめ直すとても貴重なものでした。

剣道は言わずと知れた日本の主要な武道の一つです。剣道の稽古にあつては、試合に勝つための技術の習得は他のスポーツ等と同様ではありますが、剣道をスポーツではなく武道と位置付ける大きな要因の一つとしては、「礼に始まり、礼に終わる」に代表される武

士道的精神の涵養を重要な要素として位置付けているところにあると思います。しかし、やはり高校までの部活動ではどうしても「試合に勝つ」ということが最優先事項として位置付けられてしまい、試合に勝つために日夜稽古に没頭するというのが当たり前でした。特に20年前の部活動、さらには全国大会に出場するような部活での稽古となると平日も夜遅くまで、土日も朝から晩まで一日中稽古し続けるといったのが普通であり、自分たちが稽古している内容について「なぜ？」という疑問を抱くことも殆どありませんでしたし、仮に疑問に思ったとしてもそれについて深く考えたりする余裕もなかったため、日本の武道の代表格である剣道を習っているにも関わらずそこに散りばめられている「日本人としての心」のようなものを意識することも殆どありませんでした。しかし、そのような環境

で稽古を繰り返しながら、実は無意識の中で様々な「日本人的特徴(感性)」を身につけていたということには当時は全く気がついていませんでした。

そのような私がオーストラリアの大学に留学し大学の剣道部に入部したわけですが(オーストラリアの大学に剣道部があるということについては、私も大変驚きましたが、本稿ではその部分については割愛させて頂きます)、オーストラリアで剣道をする事で私は大変多くのことを学ぶことになったのです。

まず初めに思い出されるのは、技術的な側面を通して見えたことです。日本とオーストラリアを比べれば当然ではありますが、剣道人口も剣道の技術レベルも日本に一日の長があります。(柔道は競技人口においてフランスに抜かれているようですが・・・)そのため、

私の大学の剣道部にあっても日本の大学の剣道部と比較したら技術的に劣っていたことは間違いない。しかし、日本を超えていたかもしれないのは、所属していた学生の剣道に対する気持ちであったと思います。オーストラリアという国でわざわざ日本という外国のしかもオリンピック等の種目でもなく世界的な知名度も決して高くない「剣道」をやっているのは、正直、「もの好き」以外の何者でもないと思います。でも、だからこそ彼等や彼女等の「剣道が好き」という気持ちは非常に純粹であり、強いものがあつたと思います。翻って、オーストラリアに渡つたばかりの私は、もちろん剣道が好きではありませんが、散々学生時代に顧問の先生の指示するままに稽古に明け暮れていたため、「楽しむ」という気持ちを忘れてしまっていた気がします。そのような中で、オーストラリアの学生から

すれば大好きな剣道の母国である日本から日本人学生が来た、ということであつたらとても暖かい雰囲気です。私を迎え入れてくれ、稽古の際も競うように私のところに来てくれました。そのような雰囲気でしたので、入部後は、

道具について、各所作について、そして各技術についてと様々な疑問や質問をぶつけられました。当然彼等からすれば、「日本人」である私なら全てを知っているだろうという期待を持っていたと思いますし、それが私にもひしひしと伝わってきました。しかし、いざ質問を受けてみると彼等の様々な「なぜ？」に答えられない自分がそこにはいました。例えば道具について「袴には折り目があるがどういう意味があるのか？」と聞かれても、日本では袴であるとか考えたことがなかったのだ、疑問にも思つたことがありませんでした。

（表側の5本は「仁義礼智信」の五常を、裏

側の1本は「二心がない(誠)」を意味しています。

では、技術面では問題はなかったのかという決してそうではありませんでした。彼等の疑問の深さというのが私の想像を超えていたのです。単純に剣道の技術だけであれば当然説明することはできましたが、「なぜそのような技術になったのか?」という疑問まで深掘りされると、途端に答えられなくなってしまうのです。ではそのような疑問に答えるためにはどうしなければいけないのかというと、剣道の歴史を遡り、明治維新後にそれまであった様々な剣術の流派からどのように「剣道」というものが形作られ、それぞれ技術にはどのような成り立ちがあるのかについて紐解かなければならないわけです。もちろん、「そんなことは知らない。」と返すことはいくらでもできましたし、もし日本で日本人に同じこと

を問われたらそのように回答していたかもしれませんが、なぜか、オーストラリア人の彼等を前にするとそのような回答をしてはいけなと強く感じたわけです。そのため、彼等から深い質問を受けるたびに色々な本や資料を読み漁ったり、日本にいる知人に教えを乞うたりしながら調べ上げ、彼等に事実を伝えるということを繰り返すことになりました。

この時に私が感じていたのは、「彼等の真摯な疑問に誠実に対応しなければいけない。」ということではあるのですが、更にその感情を深掘りすると「剣道という日本の武道に関するこの質問を受けているのに、それに対して適当な対応をしてしまうのは、剣道をしている日本人としてあってはならないのではないだろうか。自分が適当な対応をしたら、剣道をしている日本人自体が適当な人達だと思われるてしまうのではないだろうか。」ということ

であつたのだと思います。多数の外国人を前に日本人は私だけという環境が、私をそのような考えに至らせたのかもしれませんが、当時の私は必死に彼等の思いに応えなければという一心であつたように思います。しかし、このように「剣道」というものを通じて日本文化の一部を深掘りしたことで、そのような奥の深い文化があることの素晴らしさや、そのような文化がある国の出身であることの幸運さというものを感じることに繋がり、改めて自分が「日本人」であるということに気が付かされました。

別の思い出も紐解いてみます。ご存知の方が殆どであると思いますが、オーストラリアは多民族国家です。ヨーロッパ系の方も多いですが、アジア系の方もたくさんおりそれぞれのバックグラウンドを踏まえた独自のコミ

ュニティも色々形成されており、それがオーストラリアという国の魅力の一つにもなっています。オーストラリア人にとっては当然のことながら日本人は外国人ですし、他の国と比較して何かを優遇しているわけでもありません。日本の文化は他の国の文化ということで尊重してくれますが、特別扱いをするわけではありません。このような環境下では、「剣道」についても面白いことが起こります。日本にいと「剣道」はあくまで剣道であり、日本の武道であることに疑いを持つ人はいないでしょう。しかし、オーストラリアでは、日本人がするように主張するのと同じように、実は韓国の方は「クムドゥー」と呼んで韓国発祥の武道であると主張し、剣道クラブとは別に「クムドークラブ」が存在しています。本稿では、どちらの主張が正しいのかについての話は致しませんが、初めてその事実を知っ

た当時の私は非常に驚きました。しかし、当初は「そうはいうものの、別物な訳だから交わることはないだろう。」と思っていました。ここでオーストラリアの特徴が出るわけです。オーストラリアにとっては「剣道」でも「クムド」でも道具もルールも基本的には同じなわけであり、正直なところどっちでもいいのではないかということで、各種試合や大会は関係なしに開催されます。(大会の主権がどちらかによって呼び名が変わります。)もちろん、剣道をやっている身からすると、クムドーは剣道の「スポーツ」的要素を強調した様な競技になっており、異なる部分が多いと感じてしましますが、それはあくまで剣道をやっている身だから感じる事なのかもしれない。例えば技術面での例を挙げると、剣道の場合、竹刀はあくまで刀の代用であるため刃筋(刀の刃がついている側)がとても重視

され刃筋が通っていないなかった場合は例え指定部位を打ったとしても一本にはなりません。クムドーではあまりその点は重視されません。また、作法面での例を挙げると、剣道では一本とろうが取られようが、勝とうが負けようが喜びや悔しさを表現することは禁忌とされていますが、クムドーではそういったことはなく、一本取ればガッツポーズをしますし、取られれば審判に抗議をすることもあります。このような違いはあるものの、やはりオーストラリア人からすると大きな違いとはならないため、剣道大会でクムドーの選手と試合をすることもあれば、クムドーの大会に参加することもありました。しかし、ここでまたややこしいのが、それぞれの団体に所属するオーストラリア人はそれぞれの団体の主張が正しいと強く信じているわけで、私の所属する剣道部の皆も私以上に「剣道は日本のもの

だ。」と考えており、クムドーを受け入れたくないという意思が強いのです。そのような環境で何が起るかというと、分かりやすいうと所謂「日韓戦」が発生し、あれこれ言っても埒が明かないからという理由で「試合に勝った方が優れている」理論が形成されるわけです。私は正直、当時も今も別に剣道のルールがどうだということを気にはしておらず、そういう風に考えて主張する人たちはすれば良いと思っており、大切なのは自分がやっていることに向き合っただけでも自分を高めることだと思っています。しかし、そのような環境で試合をするからにはやはり負けるわけにはいかなくなるわけです。別にメジャースポーツの世界大会でもないのに、勝とうが負けようが何かに影響が出るわけではありませんが、世間の誰の目にも止まらない場所で行われていた試合で、自分の勝手な思い込

みかもしれませんが、すごく重いものを背負ってクムドー選手と向かい合っていました。しかし、このような環境での試合を経験することで自分の中での姿勢が明らかに変わったのを感じました。当初は「試合に負けない。」ということに重点を置いていましたが、それが次第に試合で勝つ以外の要素でも負けないということを意識するようになったわけですから、幸運にもオーストラリアにいた間に試合に負けることはありませんでしたが、一本取られることはありました。その時にも、先ほどいったように悔しさを出すことはしない。決勝戦で勝っても喜ぶことはしない。試合後も、相手や相手チームの人達がいる前では喜ぶことはしない。といった、所謂、剣道で身に付けてきた所作を愚直に実践することを強く意識するようになったわけです。このような立ち居振る舞いにどのような効果があったのか

は正直分かりません。ただ、結果として剣道をやっていくオーストラリア人ともクムドローをやっているオーストラリア人とも友好を深めることができ、クムドローのチームから「稽古に来てもらいたい。」と誘っていただいた時には、「剣道をしている日本人として間違ったことはしていないかったのかな」と思うことができました。

これら二つのエピソードを通して感じたことは、「日本人」というものを意識する時や意識しなければならない時は突然来るということです。外国に行った時や外国人と接する時は、自分が正に「日本人」の代表になります。その時接した外国人の人は「自分」という鏡を通して「日本人」というものを見るわけです。私の行動が果たしてどのように受け取られていたのかについては確認のしようも

ありませんが、これらの経験から感じたことは、会話をしたりスポーツや何かの活動をしたりする場合はその内容もちろんではありませんが、それよりも相手との接し方や立ち居振る舞い、物事への取り組み姿勢といったものこそが大切なのだという事です。では、これらの立ち居振る舞い等は何か特別な勉強や研修を受けなければ身につかないのでしょうか？決してそんなことはないと思います。

日本が時間をかけて練り上げていった日本人としての本質的な素養や美德こそがそのまま答えであるように感じます。残念ながら最近では、勉強にしろスポーツにしろどうしても「効率」や「結果」というものが重視されがちな部分もありますが、これらの日本人としての本質的な素養や美德というものは決して難しいものではないと思います。私には現在1歳になる息子がおり、共働きであるため今年か

ら保育園に通っていますが、保育園で園児たちが教えられていることの殆どが、正に、日本人が長年かけて培ってきたものとして現れているように感じました。また、以前、鹿児島で勤務していた際に入来麓を訪れた時、道ですれ違った小学生の男の子がわざわざ立ち止まってお辞儀をしながら「おはようございます」と挨拶してくれました。これも日本の文化や習慣の素晴らしい側面の一つだと思います。日本は島国という特性も相まって、外からの影響を極端に受けることなく、じっくりと時間をかけて独自の文化や習慣を形作ってきました。そのような特徴がある国に生まれたということを認識し、自分たちの文化や習慣を大切にしつつも相手を尊重する心を持つことさえできれば、その姿こそが「日本人」なのだと思います。

(海上保安庁一等海上保安正)

